

Emily Dickinson の詩における「あやうい」生の考察

山下あや

序

Emily Dickinson (1830–1883) は、批評家 T. W. Higginson への 3 通目の書簡で、“You think my gait ‘spasmodic’ —I am in danger—Sir—. . . . You think me ‘uncontrolled’ —I have no Tribunal” と述べる (L265)。¹ ここでの「突発的」(“spasmodic”)、「制御されていない」(“uncontrolled”)という形容詞は、彼女のいくつかの詩を読み、その特異さに気付いた Higginson から見た Dickinson の特徴である。一方で Dickinson 自らも「私はあやういです」(“I am in danger”)、「私は裁判所を持っていません」(“I have no Tribunal”)として詩作における制御の効かない自身の性質のあやうさを認識していたようだ。Dickinson は詩の中で、そのようなあやうさを表現してきた。火山のイメージへの自身の投影を示唆する詩もあれば、生のあやうさを強調した、大渦巻に吞まれる詩もある。ときには充填された銃に例えられる生も、あやういイメージに満ちている。これらの詩におけるあやうさは、語り手の制御が及ばない点や、その生と死に自由意志が認められない点で、制御不可能性、生の受動性を読み取ることができる。即ち Dickinson が認識していた詩作における自己のあやうさは、その詩の中で様々にシンボル化され、表現されてきたとも言える。それらを考察することで、彼女の詩的本質が見えてくるのではないかと考える。

本論では Dickinson の詩における「あやうい」生の制御不可能性、生の受動性に焦点を当て、そこから読み取ることのできる Dickinson の詩論について考察を深めたい。

1. 制御不可能な生のあやうさ

火山の噴火は何によっても制御されず、突発的かつ予測のできないものである。そして危険であるのは言わずもがな、甚大な被害を起こそうとも、無論人間の裁きは受けない。この特徴は先に述べた、Dickinson の客観的、また主観的にとらえた彼女自身の性質と酷似する。² Dickinson は火山のイメージを用い自己を表現する詩をいくつか書いている。たとえば“Volcanoes be in Sicily” (F1691) において、「火山」(“Volcano”) は、遠くシチリアや南アメリカにある火山よりも「より近く、ここに」(“nearer here”) あるものである。そして「家のベスビオ火山」(“Vesuvius at Home”) とされるその火山の噴火口に、語り手は「登りたくなり」(“Am I inclined to climb”)、それを「夢想する」(“I may contemplate”)。この詩では自己同一化された火山が表現されているが、語り手自身もその噴火口をはっきり見たことがないという点は興味深い。ここでの語り手はいつ噴火するか分からない「あやうい」火山を胸に持ちながら生きているとも言える。

また Judith Farr は、“The volcano is her symbol for passion suppressed, not only love but rage. . . . When the volcano talks, . . . it has the power to destroy” (213) と論じ、Dickinson の抑圧された情熱(愛や怒り)と火山のイメージを関連付け、それらが噴出した際の破壊的エネルギーを指摘する。そのエネルギーとは Dickinson の内面に秘められた激しい性質を指すだけでなく、Kamilla Denman の指摘するような言語的な破壊能力、つまり慣習的な句読法を打ち破り新たに言語を「造り直し、豊かにする」(188) という、再生を視野に入れた破壊を意味するエネルギーとも考えられるだろう。³ 社会的、言語的側面での抑圧が、内面に情熱を隠し持ち詩的才能に溢れた Dickinson を取り巻いていたのであれば、Dickinson の創作において、火山のように予期、制御できずにそのほとばしりが噴出したことも大いに考えられる。

この章では、Dickinson が自己を同一視したとも解釈可能な“A still—Volcano Life—” (F517)⁴ を分析し、制御不可能なあやうさを持つ生のイメージそのものを考察する。

A still—Volcano Life—
 That flickered in the night—
 When it was dark enough to do
 Without erasing sight—

A quiet—Earthquake style—
 Too subtle to suspect
 By natures this side Naples—
 The North cannot detect

The solemn—Torrid—Symbol—
 The lips that never lie—
 Whose hissing Corals part—and shut—
 And Cities—ooze away—

この詩における火山は、見た目には動きはないが、漆黒の闇にちらちらと「生」(“Life”)の炎を「明滅」(“flickered”)させている。また、「静かな火山の生」(“A still—Volcano Life”)は二連目では「静かな—地震の構え」(“A quiet—Earthquake style”)と言い換えられる。⁵ その揺れは微かすぎて、「ナポリのこちら側」(“this side Naples”)からは感知できない(“Too subtle to suspect”)。

この火山は、ナポリ湾の東岸に位置するベスビオ火山と推測される。よって“this side of Naples”(Vendler 235)が感じ取ることのできない微動は歴史的大噴火を起こしたベスビオ火山がその根源にあることが示唆される。同じようにナポリの南にそびえるベスビオ火山という「神聖な」(“solemn”)、「灼熱の」(“Torrid”)シンボルを、「北」(“The North”)は見つけることができないという。つまり「ナポリのこちら側」は「北」と同義だと考えられる。この点について Vendler が、「ナポリのこちら側」の人々を実際 Dickinson の周囲にいた人々ととらえ、彼らに対し、休むことのない危険なエネルギーを隠し持つ Dickinson は“‘Naples’ nature”を所有する(235)と論じているこ

とは興味深い。⁶

さて、最終連の最終3行は、西暦79年にベスビオ火山の大爆発により都市ポンペイが壊滅した歴史を元になっている。「唇」(“The lips”)とはベスビオ火山の火口部分、噴火口をいう。その唇は見せかけや惑わしの手口を使わない(“The lips that never lie”)。内部の爆発による一度の噴火(開口)で噴出物が流れ出し、その結果、街が埋もれてしまう。「その唇は決して嘘をつかない」(“The lips that never lie”)という表現から、このような火山の噴火活動を「真実」であると、詩人は示唆する。

たとえばDickinsonは“On my volcano grows the Grass”(F1743)において、草の生えた語り手の火山を「瞑想的な場所」(“meditative spot”)であると考えるのは一般的なこと、とした上で、その火山に潜在するあやうさを指摘する。

On my volcano grows the Grass
A meditative spot—
An acre for a Bird to choose
Would be the general thought—

How red the Fire rocks below
How insecure the sod
Did I disclose
Would populate with awe my solitude

この詩では、語り手が「この下にどれほど赤く燃える岩があるのか」(“How red the Fire rocks below”)、また、「どれほどこの地が危険か」(“How insecure the sod”)を、自分がもし「暴露」(“disclose”)すれば、「私の孤独」(“my solitude”)に「畏怖」(“awe”)が住むようになるという。語り手のいる一見孤独な場所が一瞬にして畏怖の対象となり得ることを表すこの詩では、語り手が、内部にマグマという激しい自己を湛えることが示唆される。

これらの不安定さ、あやうさは、“A still—Volcano Life—” (F517) と “On my volcano grows the Grass” (F1743) のどちらにも共通するものであり、同時に Dickinson の詩的な性質でもある、制御できない「あやうい」生そのものを示唆する表現でもある。

2. 「あやうい」生の受動性

ベスビオ火山がポンペイの都市を埋め尽くしたように、制御できない脅威が命を脅かす、あるいは命を奪いさえするイメージは Dickinson の他の詩にも見られる。たとえば3章で考察する “My Life had stood—a Loaded Gun—” (F764) において、銃声を「こだま」(“echo”) させる「暖かい光」(“cordial light”) は、噴火に際して喜びを走らせる「火山の顔」(“Vesuvian face”) のようだとされる。Robert Weisbuch はこの “volcanic ‘pleasure’” (207) が、“As the Starved Maelstrom laps the Navies” (F1064) で飢えた大渦巻や猛獣たちが獲物を捕食する様子と同じであるとし、それらの破壊的共通点を論じている (207)。

確かに、「大渦巻」(“Maelstrom”) も Dickinson の詩の中であやうさを体现するメタファーである。Dickinson は “Maelstrom”⁷ を詩の中で4回⁸ 使用しており、その内、“As the Starved Maelstrom laps the Navies” (F1064) と “Twas like a Maelstrom with a notch” (F425) の2篇で、「大渦巻」が人を呑みこむ恐怖が描かれている。中でもこの章で考察する F425では、大渦巻に吞まれては他者の力がはたらいて生還するという「あやうい」生の受動性が悪夢として3度繰り返される。Weisbuch が指摘したように F1064は、火山と同じく捕食する側として強調された大渦巻であるが、F425ではその大渦巻に吞まれる恐怖を描いているという点で、恐怖感や生のあやうさは増している。Wardrop は、“Maelstrom” を Dickinson の卓越したゴシックイメージの一例だとし、Ralph Waldo Emerson の「円環」の正道から逸れたイメージであることも示唆しながら、“the circle made frenetic beyond human control” (170) と述べる。以下の詩における語り手は、危険でいて人間の制

御の及ばない「大渦巻」に呑み込まれる恐怖体験を、語り手の体験としてではなく、総称人称の「あなた」を用いて、より一般化して表現している。

'Twas like a Maelstrom, with a notch,
That nearer, every Day,
Kept narrowing it's boiling Wheel
Until the Agony

Toyed coolly with the final inch
Of your delirious Hem—
And you dropt, lost,
When something broke—
And let you from a Dream—

(F425 第1連、第2連)

この詩において、大渦巻は沸き立つ車輪に見立てられ⁹、速度を増しながら日ごと近づいてくる。激しい苦痛を表す“Agony”は擬人化される。それは大渦巻の淵に立つ「あなた」(“you”)の、風に「狂乱」(“delirious”)する服の縁までの「最後の1インチ」(“the final inch”)を冷淡に、いたずらにもてあそぶ。2連目の3行目で「あなた」は遂に大渦巻に落ち、巻き込まれてしまう。そしてそのとき「何かが起こり」(“something broke”)、「あなた」は夢から覚める。ここまでの最初の恐怖体験の始終である。恐怖の大渦巻に呑まれた語り手は、既の所で目を覚ます。ここには限りなく死に接近した「あなた」を生に引き戻す抽象的な他者の存在がうかがえる。

また、「最後の1インチ」(“the final inch”)のイメージを併せ持つ詩として、“I stepped from Plank to Plank” (F926) が挙げられる。

I stepped from Plank to Plank
A slow and cautious way
The Stars about my Head I felt
About my Feet the Sea—

I knew not but the next
 Would be my final inch—
 This gave me that precarious Gait
 Some call Experience—

この詩の語り手は海の上を、板から板へと「ゆっくり注意深く」(“slow and cautious”) 歩む。語り手は次の一歩が「私の最後の 1 インチ」(“my final inch”) であることを知らない。その「あやうい足取り」(“precarious Gait”) を「死ぬまで」(“until death”) (Vendler 379) 歩き続けなければいけない語り手は明らかに危機に瀕している。Dickinson の詩の中で「最後の 1 インチ」で生死が決定するという危機的イメージは繰り返し登場していることが確認できる。¹⁰

これらの詩においては死と密接に関わるイメージが描かれるが、その迫りくる実感的恐怖の迫力はやはり “Twas like a Maelstrom with a notch” (F425) の大渦巻が勝る。第 3、4 連目では、「あなた」に起こる 2 度目の恐怖が語られる。

As if a Goblin with a Guage—
 Kept measuring the Hours—
 Until you felt your Second
 Weigh, helpless, in his Paws—

And not a Sinew—stirred—could help,
 And Sense was setting numb—
 When God—remembered—and the Fiend
 Let go, then, Overcome—

(第 3 連、第 4 連)

まるで「計量器を持ったゴブリン」(“a Goblin with a Guage”) のようにと、ここからも語り手は仮定の話を展開する。「あなた」の「秒」(“Seconds”) はゴブリンの「手中」(“Paws”) にあるかのように感じられるため、自分の

意志の力の埒外である状況にいるという不可抗力の苦しみが描かれる。4連目では、「筋骨」(“Sinew”)は大渦巻の旋回力に抗うことはできず、また「意識」(“Sense”)も麻痺していく様子が描かれる。

ここで思い起こされるのは、“He fumbles at your Soul” (F477) である。この詩には、ゴブリンとも解釈し得る存在、「彼」(“He”)に、「あなた」(“you”)が手も足も出せず、なされるがまま餌食とされる恐怖が描かれる。この詩において、「彼」は「あなた」の魂をまさぐり、微かにハンマーを打ちながら徐々に気を失わせていく(“He stuns you by degrees”)。「彼」は最後の一撃(“imperial Thunderbolt”)で獲物の裸の魂に爪を立てる。最後に、まるでさっきまでの恐ろしい「彼」が姿を変えたかのように、「風」(“Winds”)がその「前足」(“Paws”)で森を取り囲み、圧倒的な静けさが辺りを支配する。

When Winds hold Forests in their Paws—

The Universe—is still—

(F477, 13–14)

Josef Raab がこの詩の「彼」の行為を“divine inspiration” (288) と解釈しているように、徐々に「彼」に魂を支配されていく「あなた」の生のあやうさは詩の創作と関連していると解釈することも可能である。微かでありながら着実に獲物の命を手中に収めようとする恐怖に獲物が為す術もない様子は、“‘Twas like a Maelstrom, with a notch,” (F425) の「あなた」が計量器を持ったゴブリンにその命を手中に収められようとしている描写と類似する。しかし F425 の場合、神が「思い出し」(“remembered”) てくれて、助け舟を出す。大渦巻に吞まれ、肉体的にも精神的にも麻痺し、ゴブリンの手中に収められても、その死の淵から救出される様子はその第 1、2 連目と同じである。ここでも「あなた」の生死を左右する他者の存在が見て取れる。そしてゴブリンが大渦巻に落ちた「あなた」を解放する。「ゴブリン」に「あなた」そして「神」は「打ち勝つ」(“Overcome”)。そして最終第 5、6 連でも、「あな

た」が死を覚悟させられる悪夢が語られる。

As if your Sentence stood—pronounced—
And you were frozen led
From Dungeon's luxury of Doubt
To Gibbets, and the Dead—

And when the Film had stitched your eyes
A Creature gasped "Reprieve!"
Which Anguish was the utterest—then—
To perish, or to live?

(第5連、第6連)

大渦巻から生還した「あなた」は監獄の中で、ひととき生死に思いを巡らせることに贅沢を感じていた。しかし「判決文」("Sentence")が言い渡されると、絞首刑で死ぬのだろうか「あなた」は凍りつきながら監獄を出る。そして覚悟や諦めとともに「薄膜」("Film")が「あなた」の眼を覆うと、ある生物が「執行猶予!」("Reprieve!")と喘ぐ。そして最後は「では、どちらの苦悩が甚大であろうか／死ぬことか生きることか?」("Which Anguish was the utterest—then— / To perish, or to live?")と問うて詩は締めくくられる。ここでもまた他者の存在が、「あなた」を死から生へと引き戻す。

注目すべきことは、大渦巻に吞まれたとき(第1、2連)、大渦巻の中で命を落としそうになったとき(第3、4連)、そして監獄から出たとき(第5、6連)、死を覚悟していた「あなた」が寸前で救われていることだ。ここで、語り手が二人称「あなた」を使用して読者に語りかけてきたのは、これら死の恐怖から生還する「3つの悪夢」("three nightmares") (Vendler 199)を踏まえてこの最後の質問を投げかけるためであったことが分かる。しかし死から救われたとしても、その後安心して生き続けられるとは限らないことを、この詩の3つの悪夢は教えている。死を覚悟すれば生に引き戻さ

れ、そして生においても死の恐怖に苛まれ続けるという繰り返しも示唆される。その舵を取るのは「あなた」本人ではなく、「大渦巻」であり「ゴブリン」である。「あやうい」生を持つ者は、他者に生死の手綱を握られ、その生を受動的に繰り返す。

Vendler は、“To come back to life . . . means to come back to an existence where you . . . know the future could bring more Maelstroms, more Fiends, and more Gibbets, with their concomitant agonies, torments, and injustices” (199) と考察し、同じような死の危機が繰り返される生のあやうさを示唆する。やはりこの詩において「あなた」を死から生へと引き戻した「何か」(“something”)や「神」、「執行猶予!」と叫んだ「生物」(“a Creature”)など他者の存在が示唆するのは、他者によって生かされも殺されもする、自分では制御不能な受動的生のあやうさである。

3. あやうさと詩作

これまで、制御不可能であやうくもありながら、真実でもある火山の生や、大渦巻に吞まれるあやうい生の受動性を論じてきた。次に考察する“My Life had stood—A Loaded Gun” (F764) の語り手の「生」(“Life”)は、充填された銃である。この詩において語り手の生は火山をも髣髴とさせる爆発的威力を秘めながらも、そのものの生死には受動性が表れている。

My Life had stood—a Loaded Gun—
In Corners—till a Day
The Owner passed—identified—
And carried Me away—

And now We roam in Sovereign Woods—
And now We hunt the Doe—
And every time I speak for Him
The Mountains straight reply—

(第1連、第2連)

語り手は明確に、自分の生を「充填された銃」(“a Loaded Gun”)とみなす。「主人」(“Owner”)が自分の存在を識別し(“identified”)、携えてくれるまで、ずっと部屋の隅に立てかけられて待っている。第2連目では語り手と「主人」の一体化が見られ「私たち」(“We”)となり、王領の森林で「雌鹿」(“Doe”)を狩る。

And do I smile, such cordial light
 Upon the Valley glow—
 It is as a Vesuvian face
 Had let it's pleasure through—

And when at Night—Our good Day done—
 I guard My Master's Head—
 'Tis better than the Eider Duck's
 Deep Pillow—to have shared—

(第3連、第4連)

第3、4連目では、語り手の銃口から発せられた「あたたかな光」(“cordial light”)が谷を輝かせる。その様子は「火山の顔」(“a Vesuvian face”)が喜びを走らせている様子に例えられる。狩りを終え夜になると、語り手は「主人」(“Master”)の頭を守る。そして、それはケワタガモの羽毛でできた枕を共にするよりもずっといいと言う。

To foe of His—I'm deadly foe—
 None stir the second time—
 On whom I lay a Yellow Eye—
 Or an emphatic Thumb—

Though I than He—may longer live
 He longer must—than I—
 For I have but the power to kill,
 Without—the power to die—

(第5連、第6連)

語り手の、主人への忠誠は固く、主人の敵は断じて自分の敵だと言う。主人と一体化した語り手が黄色い目を見据え、銃を持つ親指に力を込めるとき、獲物は二度と動かなくなる。そして最終連での「命を奪う力はあるが、／死ぬ力はない」(“I have but the power to kill, / Without—the power to die”)という示唆的な語り口には、他者を殺す存在である銃の受動的な生が暗示される。「主人」の手に取られ、一体となる語り手は、獲物を打つ瞬間のみ、生の光を爆発的に輝かせる。そしてその生の光は確実に獲物を仕留める。その確実性は第5連で「獲物は二度と動かない」(“None stir the second time”)と語られる通りである。

銃の確実性は、上述した火山のイメージに繋がってくる。「火山の顔」(“a Vesuvian face”)ということばが示唆する通り、この詩における銃は、火山と同一視されている。既に考察した通り、Dickinson は火山の口(噴火口)は「決して嘘をつかない」(“The lips that never lie”) (F517)と認識していた。つまり一度の噴火で確実に町を消滅させる威力を持つ火山と同じように、Dickinson は銃の確実性にも注目したのかもしれない。¹¹ 火山の噴火口は、真実の場所であると示唆された詩的な場所でもあるのだ。

さらに興味深いことに、“My Life had stood—A Loaded Gun” (F764) の最終連の3連目(“For I have but the power to kill,”)において、Dickinson は“*For I have but the Art to kill,*”という別形の原稿(variant)を残している。Dickinson はこの詩における語り手の、「殺す力」(“the power to kill”)を「殺す技術」(“the Art to kill”)と一度は考えていたということは示唆に富む。そして、詩人 Adrienne Rich が“this woman poet also perceives herself as a lethal weapon” (87)と述べたように、また Gilbert and Gubar が“*This Gun clearly is a poet, and a Satanically ambitious poet at that*”(609)と論じるように、「銃」を詩人ととらえると、火山や銃の真実性と相まってこの詩はいつそう詩についての詩として読む価値を見出すことが可能となる。

その上でさらに「主人」を詩神と解釈すると、詩神と、受動的に詩想を与えられた語り手が一体となり、火山のような爆発的威力と銃の正確性を持つ

て共に詩を創り出すという読みが可能となる。¹² 詩人の生の一瞬の輝きが「殺す力」(“the power to kill”)であり「殺す技術」(“the Art to kill”)である。

Dickinson は “I would not paint—a picture—” (F348) の最終連 (第3連) において、自分自身を失神させる「技術」(“the Art to stun myself”)を持った詩人について書いている。

.....
 Nor would I be a Poet—
 It's finer—Own the Ear—
 Enamored—impotent—content—
 The License to revere,
 A privilege so awful
 What would the Dower be,
 Had I the Art to stun myself
 With Bolts—of Melody! (F 348, 17-24)

語り手は、詩人になるよりも、詩を鑑賞する耳を持つ方がいいという。それは「崇敬する免許」(“License to revere”)であり「とても崇高な特権」(“A privilege so awful”)である。そして、そのように鑑賞者を感動させられる天賦の才能(“the Dower”)を持てたらどれほどいいか、と一種の詩人論で詩を締め括る。

注目すべきであるのは語り手の理想とする詩人は、自分自身を「旋律の稲妻」(“Bolts of Melody”)で失神させる技術(“the Art to stun myself”)を持つということである。この激しく爆発的なメタファーは、これまで見てきた火山の突発性や大渦巻においてゴブリンに生死を操られた受動性、さらには充填された銃の生における正確性と爆発性に概して通ずるものである。その爆発によって街を取り込む火山の「あやうい」生と、大渦巻に取り込まれ命を左右される「あやうい」生は、充填された銃とその主人という詩的關係性も示唆しながら、相互関係を持つものといえるだろう。

結

Dickinson は1870年40歳のとき、詩を定義する際に次のような身体感覚を頼りにすると語っている

“If I read a book and it makes my whole body so cold no fire can warm me I know that is poetry. If I feel physically as if the top of my head were taken off, I know that is poetry” (L342a.)

詩が理解されるのは、体中があまりにも冷たくなり、火をもってしても温めることはできないとき。そして、頭の先が吹き飛ぶように感じられたときである。この有名な書簡の一節に散りばめられるあやうく爆発的な身体感覚や、まるで自己に向けられた充填された銃に撃たれることを想像しているような表現は、詩人 Dickinson が、詩に感動する読者と一体になった瞬間のできごとを表している。Dickinson は、詩想にとらわれ、時には抑圧された自己を火山の噴火や銃弾のように放出した。その命の光が自分に当たった際、死と隣り合わせのような「あやうい」恍惚に——まるで「あたたかな光」(“cordial light”)によって喜びを走らせる火山の顔のように——支配されることを詩人として何より願ったのであろう。Dickinson の詩における生のあやうさとその詩の創作とは表裏一体であるといえる。

注

- 1 以下 Dickinson の書簡集からの引用は、Johnson&Ward 版を使用し、括弧内に (L1024) のようにその番号を示す。
- 2 Dickinson は 3 通目の Master Letter の中で “Vesuvius dont talk—Etna—dont—[Thy] one of them—said a syllable—a thousand years ago, and Pompeii heard it, and hid forever—” (L233) と記す。
- 3 “Dickinson’s disruption of social structures, like her poetic image of the volcano, is primarily a linguistic one. ... Dickinson’s disruption of conventional discourse also reshapes and enriches language”
- 4 本稿での Dickinson の詩の引用は、全てこのフランクリン版からとし、その番号を (F 517) のように括弧内に示す。
- 5 *The Oxford English Dictionary* の “Earthquake” の説明は、“A shaking of the ground; ... a convulsion of the earth’s surface produced by volcanic or similar forces within the crust” とある。よって詩中の地震 (“Earthquake”) は、一連目の火山の活動と連動するごく微細な地の揺れのこととも考えられる。
- 6 “Unlike her neighbors, who live on this side of Naples and have mild natures, she possesses an (alliterating and assonating) ‘Naples’ nature; her restless and dangerous fires were present from birth.” また、Vendler は続けて、“She allows herself finally to imagine what it would be like to express herself fully, to give up social ‘lie[s]’ for unswerving and utterable truth, to express the simmering dismissiveness she has so often felt for others” と述べ、Dickinson の性質への「無理解」 (“incomprehension of her neighbors in Amherst of 1862”) (235) が、火山のイメージに自分の「鬱積した憤り」 (“a smoldering resentment”) を投影させ表現するにあたった所以であったと論じている。
- 7 アメリカ文学における “Maelstrom” の脅威のイメージは Edgar Allan Poe の短編小説 “A Descent into the Maelstrom” (1841年 5 月) が代表的である。また、Farr は Dickinson の詩 “Behind Me—dips Eternity—” (F743) の “A Crescent in the Sea—”, “Maelstrom—in the Sky” という黙示録的イメージは、Luminist や Hudson River School の絵画から “Maelstrom” のイメージを得たのだと指摘する (312)。
- 8 “At least to pray is left—is left” (F377)、“’Twas like a Maelstrom with a notch” (F425)、“Behind me dips eternity” (F743)、“As the starved maelstrom laps the navies” (F1064) の 4 篇である。
- 9 アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』の “whirlpool” の項は、[1 情熱，感情を表す：(ぐるぐる回る) 車輪 + 水のイメージ. 2 D. トマス. a 天体の渦巻き. b 時間という渦の中に落ちた人間存在.] となっている (686)。
- 10 “This is the place they hoped before” (F1284) も危機のイメージは酷似している。
- 11 実際アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』において “gun” は「暴力」と「正確無比」を表す (302)。
- 12 Vendler は、“They are lifelong companions, and the poet does not want to survive her Muse’s commanding voice” (229) と述べてこの詩における「主人」が詩神であると述べている。

引用文献

- Dickinson, Emily. Ed. Johnson, Thomas H., and Ward, Theodora. *The Letters of Emily Dickinson*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1958. Print.
- . Ed. R.W.Franklin. *The Poems of Emily Dickinson 3 Vols*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of UP, 1999. Print.
- Denman, Kamilla. “Emily Dickinson’s Volcanic Punctuation.” *Emily Dickinson: A Collection of Critical Essays*. Ed Judith Farr. New Jersey: Prentice Hall, 1996. 187–205. Print.
- Farr, Judith. *The Passion of Emily Dickinson*. Cambridge, MA and London: Harvard UP, 1992. Print.
- Franklin, R.W. *The Master Letters of Emily Dickinson*. Amherst, Mass.: Amherst College Press, 1986. Print.
- Gilbert, Sandra M and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979. Print.
- Raab, Josef. “The Metapoetic Element in Dickinson.” *The Emily Dickinson Handbook*. Ed. Gudrun Grabher et al. Amherst: U of Massachusetts P, 1998. 273–95. Print.
- Rich, Adrienne. “Vesuvius at Home: The Power of Emily Dickinson.” 1975. Repr. *On Lies, Secrets and Silence: Selected Prose 1966–1978*. New York: W. W. Norton, 1979. Print.
- Vendler, Helen. *Dickinson: Selected Poems and Commentaries*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 2010. Print.
- Wardrop, Daneen. *Emily Dickinson’s Gothic: Goblin with a Gauge*. Iowa City: U of Iowa P, 1996. Print.
- Weisbuch, Robert. “Prisming Dickinson; or, Gathering Paradise by Letting Go.” *The Emily Dickinson Handbook*. Ed. Gudrun Grabher et al. Amherst: U of Massachusetts P, 1998. 197–223. Print.
- アト・ド・フリース. 『イメージ・シンボル事典』. 山下主一郎主幹, 荒このみ他訳. 東京: 大修館書店, 2015. Print.